

# 北海道道路改良講演旅行記

谷 口 生

○六月十四日 日曜日 晴

午後一時上野驛發東北本線急行列車にて出發。水野會長、内田副會長、堀切、松木、島各理事、都筑幹事それに北海道廳の名井工學博士の同行と隨員數名の大一座、都下各新聞記者、田中平山兩幹事其の他多數の見送りに賑はしい出發であつた。

梅雨暗れの蒸し暑さも、車中の清談に忘れ、名井博士の諧謔頻發の話し上手に退屈もなく一路北行、先般完成した栗橋、目下上部橋の完成を急ぎつゝある鬼怒川の橋梁を車窓に見ながら宇都宮福島を過ぎ仙臺を過ぎた頃から次第に暑さも薄らぎ各自寢室に安らかな眠りに就く。

○六月十五日 月曜日 晴後曇、雨

午前六時半青森驛着、早朝にもかゝわらず松原青森縣知事を初め兩部長、土木課長等の出迎えあり、驛樓上待合室に少憩、水野會長内田副會長等は早速地元の新聞記者連中に包圍せられ、マグネシウム眩めき寫眞班に襲はれる等だん／＼に旅行先の多忙を思はせる。七時半發航の鐵道省御自慢の連絡船飛鸞丸に乗り船中にて朝食を共にしつつ穏やかな海を函館に向ふ。船は新しいだけに關釜連絡船よりも設備もよく加之貨車直送の設備もあるため、ガツシリとしてゐるが、津輕海峽に差しかゝる高浪の折には、都筑幹事に、「船は困る」の本音を吐かせた

程相當に搖れた。が、「船に困らない」人達の方が多く、若い人達はデツキゴルフなど楽しみながら至極平安に午後零時十分いよいよ目差す北海道講演の第一聲を發すべく函館の棧橋に靜かに横着けにされた。大森北海道廳土木部長、遠山同道路課長其他多數の人々の出迎を受けて上陸、初音屋で、函館市長招待の午餐會があり終つて直に、ランチで函館港の視察に向ふ。折柄の壓しつけるやうな密雲はたうとう雨となり、會長はじめ一同不自由なランチの中で持ち合せの傘を片手に、横しづきを直に受けながら一巡して舊棧橋に上陸直に講演會場たる市公會堂に向ふ。公會堂は、函館を良港ならしむる所の突出した臥牛山の中腹にあり函館の港と市街とを一眸の中に收め得る景勝の位置を占めてゐる、雨に煙る大小の船舶扮畫の屋根を綴る整つた形の洋風建築、走る小形な電車、正に一幅の繪である。公會堂では、本會の講演の前に市で設立せられてゐる函館市道路改善會の第三回總會があつた

がため直に其の會員の多數及一般の市民諸君が聴衆となつて、其數三百五十名午後三時半から本道での最初の講演會が開催せられた。

#### 一 開會の辭

大森北海道廳土木部長

#### 二 富源の開發と本會の使命

水野道路改良會長

#### 三 道路と港灣

内田副會長

#### 四 道路の政策

堀切理事

#### 五 自動車と街路

島理事

#### 六 閉會の辭

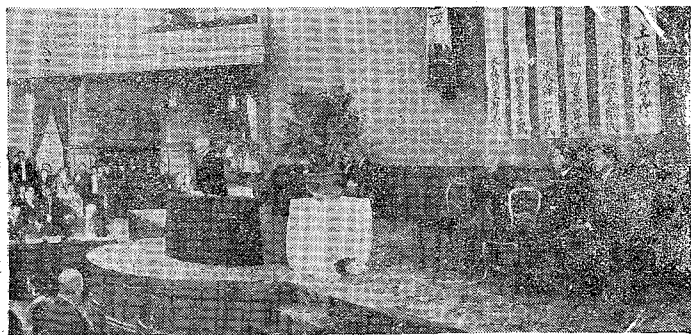
佐藤函館市長

終つて午後七時から五島軒ホテルに於ける官民合同の歡迎會に臨む。市長の歡迎の辭に應じて立たれた水野會長は此處でも又十餘分道路の改良の急務と道路改良會の使命に就いて「熱心なる各位の御努力を望む」と結ばれた一場の所懐を述べて挨拶をされた、市自身を主體とする道路改善會を設立してゐる函館市に於て、水野會長を初め前記の様な各方面から詳述せられた講演は、述べる人、

聽く人とも、ピツタリとした氣分になり得て、其の效果の偉大であつた事は言を俟たない。夜九時未だ歇まない雨の中を、函館市外湯の川温泉に車を驅りて長旅の疲れを休めた。

○六月十六日 火曜日 晴

掃き除つたやうな快晴である、昨日の雨に、塵も止めず、澄み切つた紺碧の空は、東京の埃に汚れた濛々たる青空(？)に比すべくもない心地よさである。函館驛午前八時四十分發列車で出發大沼驛に下車して直に大沼公園に向ふ、名にし負ふ新日本三景の一國立公園として名高いが、自然のまゝを貴ぶとの見地から唯二三の旅館兼料亭があるばかりで、淋しいばかりの落着きを見せてゐる。水面積百



札幌道會事堂に於ける

八十二萬餘坪の大沼と、百二十八萬餘坪の小沼とに百十二の大島小島が昔のままの樹立を載せて點在して居り、其の彼方には駒ヶ嶽の端然たる姿が聳えてゐる景色は雄大な點に於て、靜寂の點に於て内地に於て比較すべき場所はない。石油發動機船に曳かれた屋根船の名物の鮎雀焼を持ち込んで廻遊する。橋で繋いだ島と島、形面白く隠れつ顯れつする所は石油發動機船やビールは無くもがなの仙境である。駒ヶ嶽は、馬から起つた名稱でなく、その最高部の尖塔形が並列して立つてゐる形態が、三味線の駒の形に似てゐる所から附せられた名前であるとのこと、いかめしい煙吐く山に似合しからぬ優しい名前をつけられたものだ。似合しからぬと

言へば、大沼の中にある島に、離れんぐではあるが、東郷元帥と大山元帥の銅像とが建ててある。孰れ日露戦争を記念するため立てられたものに違ひないが、静寂な此の大沼公園の空気に一寸馴染が悪いと思ふ。船を北岸に着けて近くにゐる黒狐の養殖場を見せて貰つた。はじめ露西亞から移入したのは雌雄十二頭だつたものが、今では百二十餘頭になり、尙仔狐が大分育つてゐた。折悪しく脱毛期であるため、精製された襟巻等の美しさに較べて驚く程憔悴して居る。非常に臆病で、所謂狐疑性のため、狐の居所の外側は全部高い板塀を圍らされてあり、所々の小窓から覗いて見せて貰うだけである。瘦せた身體に金色の眼を光らせて、絶えずキョト



本會講演會々々の状況(六月十七日)

くしてゐる所は、あまり可愛らしくはない。それでゐて一枚數百圓とも言ふ毛皮になつて所謂紳士淑女に愛玩せられるのだから世は様々と言うべし。

ただ、仔狐は、玩具の熊のやうな恰好してゐて、場員の手からビスケットを貰つて食べる所は子供らしく、黒手鞠を轉ばすやうな恰好で築室から飛び出したり、走り込んだりするところは、思はず微笑ませる、養狐場を辭して、橋で繋かれた島島を徒歩で廻り、紅葉館の樓上で晝食を終へ午後二時七分大沼驛出發午後十時札幌に到着、恰も北海道拓殖計畫調査のため、來道せられた湯淺内務次官一行も同じ列車であつたため、話頭は大した賑

屋に投宿した。

○六月十七日 水曜日 晴

朝早く札幌市内、札幌神社、北海道帝國大學植物園等を視察して廻る。新開の土地だけに、市街も道路幅員も思ひ切つて大きく植樹帯も立派に設けられ、加之中央部の裁判所を基準とした東西の大通りの如きは中央を遊歩道とした立派なもので、市は此の區劃を境に、南何々通北何々通と截然と區別せられてゐるのはまことに立派であつて、内地の六大都市に於てすらもあれほど、普遍的に道路幅員をゆつたり取つてある所は未だ曾て無い。これは單り札幌市のみに限らず、今回の旅行に足跡を印した所何處の都邑も大小の差はあれ街衢整然まことに心持が良い。これに、市街地としての道路鋪裝の充分に行はれたならば、内地の其處此處の所謂大都市も數歩の遜りを餘義なくせられるに違ひない。

今日は道路改良會北海道支部發會式である。十五日十

六日の前兩日が恰も、北海道總鎮守たる札幌神社の例祭であつた後の事として市中もお祭氣分の名残を止め何となく賑やいでゐる。午前十一時支部發會式場たる道會議事堂に臨む。(支部發會式次第は別項の通り)

午後二時十五分より同じ會場で講演會開催、北海道の主都だけあつて聴衆千六百人満員のため入場謝絶するの盛況であつた。

一 開會の辭 土岐支部長

二 富源の開發と本會の使命 水野會長

三 道路政策 堀切理事

四 道路改良の經濟的意義 松木理事

五 道路改良の必要 内田副會長

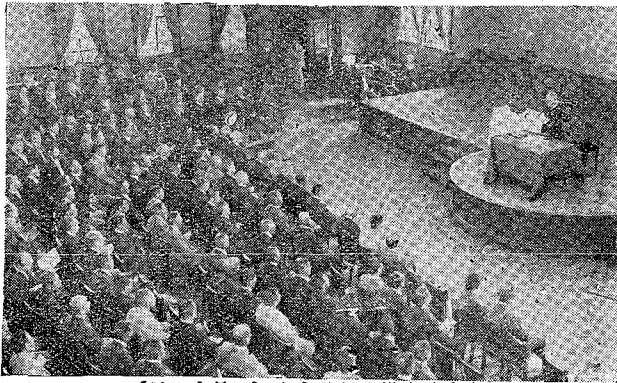
六 閉會の辭 大森本會北海道副支部長

折柄の暑氣に場内蒸熱く立錐の餘地ない聴衆も、會長の講演は一陣の涼風として倦ましめず午後五時半盛會裡

に終了した。午後七時より「いく世」に於ける官民合同の歓迎會あり北海道名物の追分節を唄きアツシ姿の踊を見せて貰つた、悠々たる歌曲朴訥な踊りの手振り野趣横溢とでも申さうか。

○六月十八日 木曜日 晴

十六日札幌に來着の丹羽本會幹事は、俄に湯淺内務次官一行に加入せられることとなり一抹の寂寥を感じたが、今朝木原理事中川理事が到着せられて一行の意氣又揚る。午前中全員市外月寒種羊場、眞駒内種畜場を視察する、兩所とも廣漠たる青野原を擁した廣大なもので、丸々と肥つた緬羊の群、牧童保護犬等のただすまるは一幅の繪であり又輕快天馬を思はせる乗用馬、頑健牛の如き輓馬等は珍らしい見物であ



(日七十月六)式會發部支道海北會本

り、場員各位の丹精を偲ぶに充分であつた。午後一時十六分發列車にて小樽に赴き直に港灣視察、露西亞、樺太方面への取引を初め内地日本海沿岸各地への交易のため船舶輻輳活氣のある港灣都市である。ただ海に通つた山のために、町並も道内他の都市に較べて美しくなく道路幅員も充分ならず、隨所に起伏する丘陵に左右せられて坂路も多く、如何に之を改善せむかと、市理事者が目下頗る熱心に考覈中とか、遠からず美しい小樽市が出来上ることを確信する。講演は山上小樽公園にある市公會堂に於て午後四時から開催。

一開會の辭

遠山本會北海道支部幹事  
二富源の開發と本會の使命 水野會長

三 文明の推移と道路改良 松木理事

四 街路と鋪裝 島理事

五 港灣と道路 内田副會長

六 閉會の辭 山本代議士

會場は疊敷で、稍不便利であつたが、聽衆四百名熱心に聽き、午後七時終了後開陽亭に於ける官民會同の歡迎會に臨む。内田副會長、松木理事兩氏は此處で一行と袂を別ち歸京の途に就かれた、遠路多用之際此の地まで御出向き下さつた御好意を謝し歸途の平安を祈つて水野會長一行と札幌に引返した。牧野幹事同夜札幌に來着。

○六月十九日 金曜日 晴

午前七時二十六分札幌出發旭川に向ふ。神居古潭の勝景を車窓に眺め午前十一時旭川着中食の後午後二時より旭川商業會議所樓上を會場として講演會開催。

一 開會の辭 大森本會北海道支部副支部長

二 挨拶 水野會長

三 道路の改良と鐵道 中川理事

四 國防と道路 木原理事

五 日米兩國に於ける道路改良の現狀 牧野幹事

六 閉會の辭 岩田旭川市長

初め水野會長は旭川で講演せられる豫定ではなかつたけれども地方の人々が切角來道せられたのに、其の聲咳に接しないことを惜しく思ふため挨拶として演壇に立たれたのであるが挨拶とは言え堂々三十分講演を要約せられたもので、聽衆も非常に喜んでゐた。師團司令部所在地であり且つ木原少將の軍備より立脚したる道路改良の必要を力説する講演があるため金ピカ連の聽衆も多く五時閉會するまで熱心な聽講者が堂に滿ちた。

講演會終了後市の北西端にあるアイヌ部落を視察したアイヌの使用什器武器、彫刻品等何れも面白く、網すき針のやうな形の竹に短い麻糸を附けたものでその麻糸を張つたり弛めたりして吹奏する樂器は小音の嫺々たる音

律が物淋しく感じられる。口邊一帶に黽したメノロの微笑は眞黒い菱形の中から白い齒がニョッキリ出るのが却つて薄氣味悪い。陳列した所謂寶物は、徳川時代の商人から物々交易で得たものらしく塗の粗惡な耳盥や三ツ葉葵の紋打つた刀の鞘などは臍物たること歴然、飾り立つてあるのが却つて氣の毒である。土人家屋の模型を設へ

四ツ割りにした丸太で檻を作つて熊を入れてゐる所の主人はシャツに半ズボン深い頬髯も青々と剃り落して鞭を持つて手振り身振り面白く能辯にいろ／＼なことを説明する。正に立板に水である。丁度内地の神社佛閣の説明者と同趣で、劈頭「吾さんも御存じでせうが此れに居りまするは熊であります」に一同啞然。「アイヌ」とは「人の義であることと、昔の熊捕りの説明とを面白く聞いて歸り、北海ホテルに於ける市官民合同の歓迎會に臨む。

○六月二十日 土曜日 晴

午前中市内外視察の上午前十一時十二分發急行列車で

野付牛町に向け出發、沿線の風物もだん／＼目に馴れたが、大きい弧狀を畫く丘陵の起伏に木の切株、蔭の大莖柏の太木、夷蝦松の森など流石に珍らしく、列車内九十三度、車外の露出地九十六度と言ふ北海道らしからぬ暑氣も、紋別あたりオコック海の見える頃は稍々涼しくなつて午後八時過野付牛町に安着一同元氣旺盛。

○六月二十一日 日曜日 晴

會場の都合上午後五時より講演會を開催せられるため午前は、附近の視察に行くもの、諸打合せ整理をする者で、其れ相當に多忙である。

講演會は午後五時より野付牛中央小學校に於て開催。町とは言へ戸數四千人人口二萬六千近く市制を布かうかと言ふ程の所だけに聴衆も四百五十人の多數であり午後八時に垂んとする薄暗まで熱心に聴講してゐた。

一開會の辭

二挨拶

大森本會北海道支部副支部長  
水野會長



三國防と道路

木原理事

四日米兩國に於ける道路改良の現狀

牧野幹事

五閉會の辭

荻野付牛町長

講演會終了後町官民合同歡迎會を梅の家にて開催せられたるに臨む。

○六月二十二日 月曜日 晴

木原理事は軍務多端のため網走、釧路の講演豫定をも打切り早朝歸京の途に就かれた。他の一行は午前九時七分發十時五十五分網走町に到着、北ヶ岡公園から町と港とを俯瞰しつゝ晝餐を了へ午後網走築港工事をランチにて視察し午後三時半より女子尋常高等小學校に於て講演會開催聽衆三百名。

一開會の辭

遠山本會北海道支部幹事

二挨拶

水野會長

三鐵道と道路

中川理事

四自動車道路に就いて

牧野幹事

五道路の改良と内燃機關發達の地方經濟に及ぼす影響

に就いて

都筑幹事

六閉會の辭

網走町長欠員代理助役

午後六時半閉會、午後八時より北盛亭に於ける町官民合同の歡迎會に臨む。

○六月二十三日 火曜日 晴

中川理事は午前六時二十分發汽車で歸京の途に就かれ他の一行は九時四十分發列車で釧路に向ふ。野付牛から分岐して置戸停車場を過ぎ北見、釧路の國境にかゝれば昔ながらの落葉松の原始森林地帯で鬱蒼たる樹海が車窓に近く逼つて壯觀である。北海道に入つても、今まで通つた所の鐵道沿線は開拓せられるか或は山林火事のため赤裸々になつた樹幹を晒してゐる山を見て通つたばかりだから此處の原始林はまことに珍らしい、木材の北海道を初めて見たわけである。本別、川合(池田)を経て厚内に出れば、太平洋の浪のウネリも大きく磯濱を囀む光景

は雄大で、天氣晴朗だつたオコック海沿岸の網走を今朝  
出た身はガスに掩はれた太平洋を不思議にも珍らしく見

馬の蹄にかゝらぬがもつけの幸ひ、楚々とした姿を風に  
委せ、床しい香を時折りの汽車の窓に透るばかりである。

近藤重藏東蝦新道記

(縦三尺六寸一分  
横一尺四寸五分)

蝦夷東江之徼自射麻兒至尾朗涉海岸之嶺若藪筑子龍内峰巖絶壁登作  
越超盤步蹀躞儀附狹攀攀誤失一步則此盤殆必真墮夷族死此嶺間亦有之  
江戸輜軒使近藤君一徑此嶺有急新開道於山後急登官府安婦之日風雨阻  
道路塞滯滯數日於是慨然發憤將道詞果及夷族商議出資散財自當邊心  
別湖水至神芟留按針南沿流而下出鑿田以月登降九三里而近伐木架流為橋  
碎石投谷為梯行路初寬跋涉無危人夷類之是所以江戸餘澤波及夷族而為近藤  
君思人思夷之隆德也余與英華記姓名揭刀勝神祠  
大日本寬政十年戊午十一月朔庚申  
江戸輜軒使近藤君重藏  
從者下野源助録  
金平  
孫七  
夷族六十八人

近藤重藏東蝦新道記 板既久遠字畫漫漶不可辨改士二四日歸江豐西五及字數力再寫以誌余言即書與一  
本藏於本堂

つつ走る、鐵道線路に沿ふ廣漠の野には鈴蘭が、遅咲き  
の花房を彼所此處に散らして一面に生えてゐる。都では  
星董黨の寵兒であるが、本場の此の地では、徒に放牧の

列車の進むにつれてだん／＼ガスが深く垂れこめて近く  
の磯に散る波がしらも音でそれと知るばかり、車窓に近  
く牧草を喰む馬の姿も影の如く夢の如く模糊として後方

に走り去る。午後七時過ぎ釧路着、名物と云ふだけあつて此處は又格別深いガスのために、押しつけられたやうな薄暗さの中に細い水玉が浮動して居り一種の息苦しささへ感じられる。午後八時半から市役所樓上で開かれた市官民合同の歓迎會に臨む。高臺になつた市役所の窓から見下せば、市中も港の船も一様に鼠色のヴェールに包まれて、睜かされた燈火にかすかに其れと首肯されるばかり。

○六月二十四日 水曜日 曇

水野會長は講演會に出席前午前九時より工事中の釧路築港を視察に赴かれたが、講演會は午前九時二十分前から釧路公會堂に於て開催聴衆五百名廣い會場も一杯の人である。

一 開會の辭

都筑幹事

二 北海道の道路政策

遠山本會北海道支部幹事

三 道路と街路

島理事

四 富源の開發と本會の使命 水野會長

五 閉會の辭

二木釧路市長

午後零時十分終了、市役所樓上で中食を認め午後一時三十分釧路驛發午後六時二十六分帶廣町着、少憩の後、同町十勝公會堂に於ける官民合同の歓迎會に臨む。

○六月二十五日 木曜日 晴

午前六時半帶廣町發、三臺の自動車を連ねて直東太平洋岸の茂寄村廣尾ヒロシに向ふ。悪路を以て有名な北海道には珍らしく立派な道路で、最少幅員二間半、十勝平原中部より太平洋岸に達する主要道路として地方費道に認定されてある。幸震サツナを経て驛遞所のある大樹までは一眸無涯所謂の十勝平原で、北海道らしい景色である。大樹から廣尾までは所謂檜柏の原始林で、蟲々たる大木が道の左右に展開して四五里の間續いて居る様は實に雄大で、北見、釧路の國境にある落葉松の原始林と好一對である。廣尾は、本道太平洋岸に於ける最も大きな漁場で、寒暖

二潮流の接衝區域に當つて居るため、魚族豊富我國を通じても屈指の漁場で海産物年産額は一千萬圓に近い。此の地はまた寛政十年秋江戸輜軒使近藤重藏が字「ルベシベツ」より字「ピタタヌンケ」に至る道路を開鑿した史實を存して居る所である。重藏の従者下野源助（眞名は木村謙次號は子虛）が、之を頌した碑を作り、村内十勝神社に納めたものが、今其の社の寶物として保存されてゐる。（此の事業は今より實に百二十七年前で北海道に於ける道路開鑿事業の嚆矢である。當時のアイヌを相手に工事に苦心した狀が、碑文によつて充分窺ふことが出来る尙重藏が道路の改良に意を用いたことは、此の道路の開通した際路傍に建てた左の標木を以ても知ることが出来る。）

このみちは、はまとほり、トモツクシならびにピンナイとらの、なんしよありて、わうらいのもの、なんぎすべきによりて、このたび、あらたに、きりひらきたるのあいだ、このみちわうらいのもの、ひとえだのき、いつばんのよしなりとも

きりすかして、ながく、わうらいのためを、こゝろかくべきものなり

寛政十年十月

近 藤 重 藏

廣尾に着いて、丘上より渺漂たる太平洋漁場と、廣尾の町とを俯瞰して引返し途中で晝食を攝り午後一時半帶廣に歸着した、此の往復里程四十四里。埃に汚れた身體を休む暇もなく十勝公會堂に於ける講演會に臨む。聴衆三百人。

一開會の辭

遠山本會北海道支部幹事

二挨拶

水野會長

三道路の維持に就いて

比田理事

四日米兩國の道路經濟に就て

牧野幹事

五道路の改良と内燃機關發達の地方經濟に及ぼす影響に就いて

都筑幹事

六閉會の辭

飯田帶廣町長

午後四時四十五分終了。水野會長は挨拶を了へて後間

内北海製糖會社工場、十勝農事試験、場外人農家など視察に赴かれた。帯廣町は、前に記した野付牛町と共に近く市制を布かうかとして居る所だけあつて、戸數四千餘、人口二萬五千人に近く、十勝國の中樞地として賑やかに活氣ある町である、街衢も整然として各大通りは歩車道の區別も附けた立派な道路である、たゞ、歩車道境の街渠から車道の側に二三尺出して、高さ一尺あまり頭に鐵のついた杭が一列に並べてあつて、それに「左側通行」とか「往來安全」とかペンキで書いてある。馬繫杭か、街渠の保護のためか、どちらにしても目障りになつてならなかつた。往來不<sup>○</sup>安全の素になりさうである。

午後十時四十一分帯廣驛發列車中に夜を明かして室蘭に向ふ。

○六月二十六日 金曜日 晴

午後零時五十一分室蘭驛着、直にプラザー軒に於ける市官民合同歡迎會に臨み終つて市役所樓上に於ける講演

會に出席した、聽衆三百五十名

一開會の辭

大森本會北海道支部副支部長

二挨拶

水野會長

三時代の推移と道路の改良 比田理事

四日米兩國の道路經濟に就て 牧野幹事

五閉會の辭

中村室蘭市長

午後五時終了、午後八時より常磐に於ける市長主催の晩餐會に臨む。

○六月二十七日 土曜日 晴

午前八時半より、工事中の室蘭築港をランチで巡覽し我國で私設のものとしては第一位の日本製鋼所を參觀すべく製鋼部棧橋に上陸、工場内を巡覽した、大砲、砲架水雷氣室等の兵器や、船舶用諸器械、車輪、車軸等に到るまで、白熱の鋼製から順次形を造る行程を見せて貰つて今更ながら科學の進歩に目を圓くして輪西の同社製鐵工場に向ふ、此處は社所有の北海道内鑛山、朝鮮鑛山より

産出する鑛石や、朝鮮、支那、マレー半島方面から買入れる鑛石を銑鐵にするまでの凡有設備が薄黒くも整然として居る。銑鐵製造の副産物として鑛滓煉瓦、鑛滓セメントを出し溶鑛燃料コークスの副産物として石炭瓦斯、タール其の他石炭瓦斯發生による一切のものを精製して

瓦斯は工場用に、其の他は市場に出すまでの總ての設備も亦整然と揃つてゐる、兵器方面の需要の減つた今日營業狀態も活氣横溢とは見えなかつたが、民間事業の得てして不振の我國に於て、此の社の限りなき發展を祈つて止まない。參觀後會社が、明治四十四年九月、當時東官たりし今上陛下の本社行啓の際御宿舎に充てるため新築した由緒ある瑞泉閣で、晝餐の饗應に預り午後零時五十分發列車で、登別温泉に向ふ。

函館を振出しに昨日の室蘭まで寧日なしの講演旅行の疲れを休めるべく、水野會長、比田、島、各理事、牧野都筑各幹事の本會側に北海道支部の大森副支部長、遠山

幹事等の一行午後三時登別温泉に着き北海道に来て初めてのびくと温泉に浸つて休養した。夕刻村長さんの御案内で温泉地獄めぐりをやり湯沼を見た後、常盤別荘と瀧ノ家の二手に別れた道廳主催の慰勞宴に歡を盡して郭公の聲を枕に眠る。

○六月二十二日 日曜日 晴

午前九時登別温泉を出發、苫小牧を経て王子製紙株式會社の經營に係る運材鐵道によつて沿線の製紙原料林を視察しつつ支笏湖に到着、紺碧鏡の如き湖水の彼方には樽前山の噴煙神々しく、折柄の新緑は水に浸つて美しくも靜かである。王子製紙會社の湖畔俱樂部で晝餐の御馳走になる、同俱樂部は建築木材はもとより壁紙まで御手もので建設せられた物で、洋室、日本室ともに淡泊とした結構ながら善美が盡されてあつた。食後船を湖上に泛べて鱒釣りを行ふ。一時間前後の内に、牧野幹事を筆頭に何れも數尾づつ、アメマスヒメマスの尺に近いものを釣

り上げ、水野會長が大きな鱒を釣り上げられた時には、支部の寫眞班君が素早くカメラに収めて居た。一尾も釣上げないのは比田理事と都筑幹事の二人だけで、糸を垂れ竿を握り締めて、其の犯意充分であるのに、其の辯に曰く「殺生は嫌ひだ」と。

下山の時刻が来たため盡きぬ面白味に心を残して苦小牧に下り、會社の俱樂部でお茶の攝待を受けて少憩、午後五時五十三分、王子製紙會社の好意を謝して苦小牧驛を出發一路歸途に就く。午後九時過札幌通過、土岐長官はじめ道廳側市其の他多數の方々の御見送りを受け、比田理事牧野幹事が此處に下車せられた外、一同元氣旺に函館へ向ふ。

○六月二十九日 月曜日 晴

汽車中に夜を明かし、午前六時六分函館着。榎橋待合室で朝食を攝り、乗船大森土木部長、遠山道廳道路課長の御見送り下さつたのも、岸壁と船の上の別れくにな

つて、いよく北海道の地を離れた。津輕海峡の真中で驟雨に襲はれたばかりで、穩やかに正午青森に到着、松原青森縣知事其の他の方々の迎送を受け驛待合室で中食の午後一時三十分青森發常盤線急行にて出發。

○六月三十日 火曜日 晴

午前七時上野驛着、水野會長初め一同元氣旺盛である。六月十四日出發以來所要日數十七日間、講演九ヶ所、其の延時間は二十四時間に及ぶ。會長以下の各地での有益な講演は、北海道々路現狀に即して聴衆に少からぬ感動を與へ、道路を改良することが、北海道拓殖上唯一の捷路であることの自覺を與へたもので、本會の此度の舉が大成功裡に其の使命を果したものであると斷言して憚らない。

水野會長初め役員各位が、何れも公私多端の身をわざわざ北海道まで御出向になつた好意に對しては、深く感謝する所で、特に水野會長の如きは、函館を初め最終の

室蘭に至る九ヶ所の講演會に於て挨拶の名の下に堂々道

末輩の以て範とすべきものである。

路の改良の急務を力説せられ、洵に敬服の外はない。加

終りに、今回の講演旅行に方り各地での御町重なる歡

之講演の餘暇地方の人士の陳情は細大洩らさず熱心に聽

迎を謝し且つ我々の旅行、視察に凡有便宜を御與へ下さ

き、視察を求むる場所には言下に之に應じて立たれ或ひ

つた各方面の御好意に對し深甚なる敬意を表して筆を描

は自ら進んで視察に向かされる等倦む所無き活動に至つ

く。(終)

ては、其の精力の強大と總てに對して熱心である所我々

#### ◆編輯閑談

◇雜誌經營上の第一要件は何といふても發行部數を、出来る丈多くして行くといふことにあるが、本誌も昨年の今頃から見ると、千に近い數が殖えてゐる。ツマリ一年に一千部宛殖えて行くことになるのであるが、「道路の改良」がいかにか斯種雜誌界を風靡してゐるかを考へて見ると、マダ／＼殖える餘地もあろうしまた殖したいので、年末までに發行部數を一萬部にしたいといふ考へで、其の第一着手として、地方の青年會や、處女會や、町村自身が讀者になつて頂くことにして、近々田中さんか各方面へ依頼して頂くことにした。

◇田中さんで一寸氣を引いたが、編輯室には田中といふ姓が二人ある。一人は五尺を一寸出た位の美男であり、他は六尺近くの偉丈夫である。俱に眼鏡をかけ、俱に敏腕の所有者であり、雄辯の大家である。しかも明晰なる頭腦と茶氣あることに至つて益々之れ相似たるなりであり、其の押の強いことに於て更に甲乙がない。偶々外から田中さんに電話でもあると、サーどちらの田中さんか、大きい田中さんと云へば一方は年が大きいし、一方は身體が大きい、小さい田中さんと云へば一方は身體が小さく一方は何やらが小さい。偉い田中さんと云へば一方は位が偉く、一方は武勇傳で之亦内外に其の名が高い、其の他悉くが相似たりで、茲に於て獨り新米の給仕君のみが措置に迷ふてゐるのも氣の毒でありまた事務簡捷の上から云つてもまつたく能率増進を阻害することがナカ／＼夥しい。しかも俱に那家路政の權威者であり、熱心家であることに於て編輯室の寶であり矣。(小)